

Title	Genteel traditionの崩壊
Sub Title	The break-down of Genteel tradition
Author	安原, 基輔(Yasuhara, Motosuke)
Publisher	慶應義塾大学文学部藝文学会
Publication year	1954
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.3, (1954. 1) ,p.63- 73
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00030001-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Genteel Tradition の崩壊

安 原 基 輔

〔本論文は一九五七年前期、慶應義塾學事振興資金による研究、「兩大戰中間期の米國小説——その社會學的、思想史的研究」の一部である。〕

一

兩大戰中間期米國小説のもつとも顯著な特徴の一つは、當時の米國は實際には堅實な進歩と向上のあゆみをつづけてゐたにもかかはらず、大多數の小説家はもつばら米國文化の缺點、くらい一面だけをとりあげて、それを強調した點にある。かれらのゑがきだした米國人と米國の社會は俗悪低劣であるか、欺瞞と不徳、享樂と犯罪、搾取と貧困とにみちあふれた社會であつたやうな印象をあたへる。そして、このやうな作品が、年代順にいつて Theodore Dreiser を筆頭に、Gertrude Steine, H. L. Mencken, John Dos Passos 等の非アングロ・サクソン系民族出身の批評家、思想家、作家の影響のもとにつくられてきたといふ事實こそは、われわれがもつとも注目して、その成因の究明に努力しなければならないことである。

Henry Steele Commager はその原因として、米國の經濟的發展があまりにも急激で、作家がそれに追従していき、それを理解することができなかつたことを考慮してゐるが、(1) 西洋文明の否定、絶望の表白は實は第一次世界大戰後のヨーロッパに共通した傾向で、

一九二〇年代、三〇年代の新進作家は Mallarmé, Verlaine, Proust, James Joyce, Freud, Jung, Pavlov といったヨーロッパの詩人、小説家、思想家の影響下につけやきばをふりかざしてゐた感がある。まつたく戦禍のそとにあつて、戦時インフレによる好景氣を謳歌してゐた米國の國內情勢をかながへると、一九二〇年代の小説にくらいかげが濃厚なのは一つの矛盾した現象である。一九三〇年代には經濟界の大恐慌や樞軸三國の策動による國際聯盟態勢の崩壊と戰爭の不安とがあつたけれども、二〇年代には左様なものは全然なかつた。米國人の一部少數のものがヨーロッパの戦禍を目撃したり、ちよつぱり戰爭を経験してきたり、あるひはヨーロッパ人の作品を讀んでみて、それらをもとにしてつくりあげたのが二〇年代の文藝作品であり、時代思潮の傾向であつた。それで Sinclair Lewis の諷刺も Hemingway や Thomas Wolfe や Dos Passos の憂鬱も Scott Fitzgerald のソフィスティケイションも不徹底なものであつた。三〇年代にぞた Farrell, Caldwell, Steinbeck の作品の方がふかみがあるのである。にもかかはらず、そのやうな一種のあそびの文藝が當時の米國の知識人の喝采を博したのであつた。

上記の非アングロ・サクソン系二世連中の人世觀察の態度がまたこのやうな時代の傾向とよく一致してゐた。かれらの父母または祖父母は新來の移民として Chicago や New Orleans の貧民街で貧苦の生活をおくつた。それでかれらはその幼年時代を米國の政治・經濟活動の圏外にあつて、米國內の異分子として、米國の社會活動を批判的なつめたい眼で觀察し、分析し、アングロ・サクソンの傳統、ことにその genteel tradition とよばれるものの虚偽を剔抉することができたのである。

一九二〇年代の米國小説の特徴としては、傳統への反抗、ふるい文學形式の放棄、絶望の表白、性欲描寫の露骨化とまではいかなくとも、作中における戀愛の重要性の増加、社會小説、心理小説の發生等がかぞへられるのであるが、全體の様式そのものは依然として realism 乃至 naturalism のそれであつて、内容の點からみても、一九二〇年代になつて突然にあたらしいものができあがつたのではない。にもかかはらず「まよくる世代」(The Lost Generation)の文學が異常にきわだつてみえるのは、それが二〇世紀最初の二〇

1. Commager, Henry Steele: *The American Mind*, Chapt. XII. "The Literature of Revolt," p. 275, New Haven, Yale University Press, 1950.

年間といふ文學的に比較的の不毛だった時代のあとをうけてゐるからにすぎない。

一九二〇年代は米國における一種の文藝復興期ともいへる。この時代の文藝の諸傾向はすでに前世紀の第四四半期に存在してゐたの
でさる。たとへば、T. S. Eliot や Ezra Pound のやうに、米國文化の後進性に不満をいだいてヨーロッパへ居をうつすことは、Henry
James 一派がすでに實行してゐるし、社會改良への關心は Howells や Edward Bellamy の文學にすでにあらわれてゐる。十九世紀
末のユートピア文學と二〇世紀の社會學的小説とは、質も形式もことなることはこのばあい問題にならない。諷刺小説もまたすでに
Howells や Twain にみられ、その諷刺は Sinclair Lewis のものよりもかへつて辛辣であつた。曝露小説にいたつては、Upton
Sinclair 自身が今世紀初頭から書きつづけてきたものである。したがつて、一九二〇年代の米國小説は様式的には前時代以來のものを
繼承して、内容的にはかつての主流と傍流とが交替して、あたらしい艦装をととのへたものなのである。そして、この文學は當時の米國
の實社會生活とはいささか遊離したものであるひはそのごく一部分をうつしたものにすぎなかつたのに、文學の世界的傾向にしたがつて
ゐたのと Sinclair Lewis の Nobel 文學賞受賞などもあつて、この種の文學におほきな比重がおかれることになつた。そこで Sinclair
Lewis や Dos Passos や Hemingway, Thomas Wolfe らの文學だけをみてみると、楯の半面だけを見て、他の一面をみるのをわす
れたこととなる。それでわれわれは順序として、一九二〇年代、三〇年代の作家からはきははれてゐた米國のふるい傳統と文學上の
genteel tradition を一瞥しておかねばならない。

一一

衆知のごとく、元來アメリカは Commonwealth 地方の Puritans の商工業者と、南部の Virginia, Carolina, Maryland を中心
とする大地主とを中核として國家統一をなしとげたもので、兩者いずれもアングロ・サクソン系の民族からなつてゐた。フランス系の
Huguenots, オランダ、ドイツ、スウェーデン系の Calvinists や Lutherans 等は少數民族といふ關係もあつて、政治、經濟、文化の

實權をアングロ・サクソン系の手にゆだねて、自分たちは信仰と農耕生活の自由を享受するだけで満足してゐた。そこで米國文化の中樞は自然に英國式のものになつて、米國の上・中流階級の理想は英國紳士道におかれてゐた。英國貴族流の禮儀作法、博愛の精神、剛毅、慎重、節度、正義の觀念が米國富裕階級の理想であり、また、英國の中産階級の人生觀、處世訓が米國中流階級のそれであつた。しかし、一六八七年に英國で出版せられた Newton の *Principia* が一七〇八年にはじめて米國につたはつたといふやうな交通不便の時代においては、米國人の英國をみる眼には多分に理想化のいろめがかかつてゐたのはやむをえないことであつた。The Mother Country とか the Old Country とかよばれた英國に對して、米國人がいかに憧憬の念をいだいてゐたかは、Washington Irving の *The Sketch Book* の冒頭の一章 *Voyage* をよめばすべわかるとである。したがつて、米國人が英國をみるときにはおほくの誇張や過少評價やみのがしがあつて、かならずしも英國の實情が米國へつたはらなかつた。Victorianism の弊が英國よりもかへつて米國においてきびしかつたといふのもそのためである。(2) この Victorianism に古來の Puritanism あるひはその原型である Calvinism がくははつたものがいはゆる genteel tradition であつて、それは特に文藝作品の形式を拘束するものとしてつよい支配力をもつてゐた。このきはめて貴族的で、保守的で、偏狭であつた風潮は Boston の上流階級、Brahmin とよばれたひとびとのあいだにひびきかはれて、Hawthorne や Longfellow などの作品を通じて全米にひろがつたのである。

Puritans は人間を神の選民 (elite) としからざるものと大別した。神の選民は不斷の修業と努力によつて向上し、天國に再生できるが、しからざるものはいかに努力しても永却にすくはれることがないのである。かくしてかれらはすべて犯罪人に對して冷淡苛酷であつた。みづからを選民中の選民とみなす Brahmins は禮儀作法と服裝にやかましく、教養をたつとび、すべて不愉快なもの、傳統にそむくもの、みにくいものをしりぞけてゐた。(3) この好尚のなかには個人主義と獨立、偽善のつめたいものが多分にふくまれてゐた

2. Ward, A. C.: *Twentieth-Century Literature, 1901-1940*, 11th edn., London, Methuen, Chapt. 1, p. 1.

3. Blankenship, Russell: *American Literature*, BK. III, Chapt. XIII, "The New England Renaissance," Revised edn. 1949, New York, Henry Holt.

けれども、米國文化に對する New England の支配力がつづくあいだはこれをやぶることが困難であつた。文藝作品に對しても道德的批判が峻烈で、極端にはしることをきらひ醜惡なものをことごとくしりぞけた。genteel tradition に對立するものとしては西部の frontierism ともいふべきものがあつたが、すべて文學にこころやすめるものは New England の傳統に屈服せざるをえなかつた。Mark Twain などもそれとの妥協を餘儀なくされたことは衆知の事實である。

ところが、文學上におつては、Theodore Dreiser の *Sister Carrie* が印刷せられた一九〇〇年ごろからその拘束力がゆるんできて、第一次大戦後には文學上の genteel tradition は文學の主流から全然とほざかることになつて、それをまもつた作家といへば Edith Wharton, Anne Sedgewick, Willa Cather, Ellen Glasgow, Dorothy Canfield Fisher, それにすこしかたがはちがふが James Branch Cabell, Thornton Wilder くらいのものになつた。女性作家の數がおほいのは、女性の方が社會活動の中心から比較的にとほく、その影響をうけることがすくなかつたからであらう。また、これらの作家の青年前期が戦前にすぎされたことも一つの原因であつたらう。これらの作家の人生觀照の態度はたしかにふるい。かれらは傳統をたつとび、作品の Style にやかましく、社會をえがくよりも個人をえがき、新時代の新傾向には批判的であつた。しかし、その態度は決して偏狹、頑固なものではなかつた。ただ Victorians 式のつつましやかさ、ひかへめをもつて制作したといふにすぎなかつたのである。そこがわれわれにものたりないところであるが、Willa Cather の作品にも、Edith Wharton の作品にも、つつましやかな時代批判や諷刺がふくまれてゐるし、まづたく現實を逃避してゐた Cabell の作品にもまた相當な諷刺と比喩とがはいつてゐる。

一九二〇年代、三〇年代の米國作家はアメリカの眞のすがたをみおとしてゐたのである。あるひはそれを故意に問題にしなかつたのであるが、第二次大戦はかれらにそのあやまりを認識させることにやくだつた。Willa Cather のえがいた Antonia Shimerda や Alexandra Bergson のやうなアメリカ中・西部の農村の菁實勤勉な人物は、一九五〇年代になつて、あらたに作家の關心をひくやうになつた。Hemingway の *The Old Man and the Sea* の老漁夫、John Steinbeck の *East of Eden* の Charles Trask と Samuel Hamilton, Marjorie Kinnan Rawlings の *The Sjojourners* の Asahel Linden, じつれもみな、男女の差こそあれ、健全なる米國を

ちかづくるための *hod-workers* だいたいのたちである。Carl Sandburg の抑揚にとんだ古風ながら流麗な文章でつくられた大作 *The Remembrance Rock* (1948) は、一六〇八年から一九四五年にわたる John Spong その他 Puritan fathers の子孫の發展史である。歴史小説はなにも第二次大戦後にはじまったものではないが、このやうな形式の三世紀半にわたる米國の發展史のかたちをかりた歴史小説ができて、米國人が自分たちの過去をみなおしてきてゐることに重大な意義がある。

それはとにかく、米國の傳統は決して Puritans 的に窮屈なものではなかつた。Andre Siegfried もいふごとく、(4) Puritanism の母體をなした Calvinism においては、自分を elite とみなしながらも、自分の修業を達成するため社會一般をきよめ、向上させる義務を感じてゐるのである。Quakers は信者の精神生活の内容を向上させることに、ひろく世界にその message をおくるのである。彼等の Advices は “Live not for yourselves but for others. Remember your responsibility as citizens for the government of your own town and country. Study the causes of social evils. Work for an order of society based on mutual service and directed beyond all material ends to the true enchantment of human lives.” とある。かくて米國人は今日もなほ未開人の向上、未開發地域の開拓におほきな義務を感じてゐるのである。残念ながら、かやうなことには、前世紀以來の帝國主義の臭氣が多、分にもつてゐるけれども、そのやうなことはが國策の標語としてかかげられるところに、米國の傳統ががたをみせてゐる。

一九二〇年代の青年層が反撥をしめした米國中流階級の社會道德については、いままうこしく考察をしておく必要があらう。

米國人は頭初から實利的であつた。このことは Benjamin Franklin の生涯と業績とをしらべてみれば、だれでもすぐ氣のつくことだ。米國人は Franklin の遺言をそのままきいてゐるのではないかとおもはれるほどである。がその傾向は前世紀の後半以來英國

4. Siegfried, André: *America Comes of Age*, Part I, Chapt. III, “The Religious Aspect,” pp. 34-35, New York, Harcourt, Brace, 1927.

5. Fairs, R. Duncan: *Quakerism: A Faith for Ordinary Men*, “How Has Quakerism Been Presented?” pp. 17-18, Allen, Unwin, London, 1951.

の utilitarianism の支援をうけて、いよいよ強固なものになった。米國人はあたらしい發明、發見や學識をよく實用化して、經營を合理化し、分業と綜合とによるなだれ作業を創案し、家庭生活をも科學化した。この最後のものについて實例をあげれば、おなじ Sinclair Lewis のつくつた、中西部に取題した二つの小説の主人公、一九二二年の George F. Babbitt の家庭と、一九四五年の Neil Kingsblood の家庭との設備を比較してみれば、⁶⁾この二〇年間における米國家庭の科學化の一斑をしることができぬ。Floral Heights の Babbitt 家では電燈、電氣ストーヴ、vacuum cleaner、扇風機、電氣コーヒーわかし、電氣パンやき機が珍什としてかぞへたてられるのに、Sylvan Park の Kingsblood 家では、そんなものはあたりまへになつて、しろエナメルぬりの電氣熨爐、電氣冷蔵庫、自動皿あらい機、塵埃處理機などがあげられる。醫師 Roy Droyer 家では地下室に air-condition のための機械さへある。⁷⁾しかし、科學の普及はアメリカの國民性におほくの變化を將來した。それをかんがへるためには進化論の影響を問題にせねばならない。

米國人は頭初から文明と人類の進歩についてつよい信念をもつてゐた。新世界の廣大な土地と豊富な資源とは、勤勉で質素でありさへすれば、だれにでも十二分の資産をあたへてくれた。ときには冷酷きはまる自然とのたたかひのためには、各人それぞれの創意と工夫とが必要であつた。そのためであらう、米國人のあいだには非常な發明、發見の才が養成せられ、多數の發明、發見家がでてゐる。實際はたらきがひは充分にあつた。米國の國力はのびるばかりであつた。そこで米國人のあいだには非常な樂天感と自由平等、個人主義思想が醸成せられるとともに、文明の進歩に對する信念がつつかはれてゐた。そこに Charles Darwin の進化論が輸入されてきた。Tennessee 州の Dayton における有名な裁判事件のやうに、一部無智頑迷なキリスト教徒 (Dayton のは全部 Protestants) のなかには進化論を排斥したのもあつたが、米國人全體としてはこの新學說に對してほとんど信仰のやうな信頼をよせて、social Darwinism とつづふことばもあるやうに、社會現象萬般を進化論によつて説明、理解しようとするやうになつた。發展途中の資本主義は、

6. Lewis, Sinclair: *Babbitt*, Chapt. I, iii-iv, New York, Harcourt Brace, 1922.

Ibid.: *Kingsblood Royal*, Chapt. 2-3, New York, Random House, 1947.

7. *Ibid.*: *Cass Timberlane*, Chapt. 3, p. 18, New York, Random House, 1945.

社會各方面に多數の "self-made" men (立志傳中の人物) をつくつて、米國人にはおよそ希望してえられないものがないやうにもはれて、今世紀初頭にはいはゆる the Contented Age を現出した。ただこの時代の青少年の志望は政治、經濟の方面にむけられて、文學志望のものがすくなかつたために、それは文學上の不毛時代になつたのは残念なことであつた。

科學の發達、進化論の出現はキリスト教的の世界觀を崩壞させて、宗教の權威が弱少化した。Clarence Day の "God and My Father" (1920) は一九世紀末の良識をもつた人の宗教に對する態度をつたへて妙であるが、第一次大戰後の青少年は、Week-end には自動車に同乗してとほでをして、もはや教會に參詣して、Clarence Day Sr. のやうに牧師の説教の馬鹿らしさにいらうすることはなくなつた。父親が日曜日に "hears his daughter's voice, Singing in the village choir and it makes his heart rejoice" とつた状態がむかしになつたのはまだしも、女性特に中流以下の女性の職業戰線進出と經濟的獨立、移動の自由は性の解放を將來して、青少年の桃色遊戲までが増加した。米國映畫を通じてみる "Happens" の無軌道行爲には日本人までまゆをひそめたものであるし、Ben B. Lindsey 判事の *The Companionate Marriage* (1927) は左様な時代のあたらしい結婚觀をつづつたものとして、いまなお世人の記憶にあたらし。

米國人はまた公正をたつとび、理性を重視して、紛争を討論、合議によつて解決し、多數の支配と經濟的機會均等を信じて、その信念のもとに勤勉によくはたらいだ。ときに公益をわすれて私腹をこやすものがあればそれを攻撃したので、Carnegie や Lockteller は公益事業に出資して、「アメリカの良心」の攻撃の鋭鋒をさげねばならなかつた。

ところが第一次世界大戰を契機として、大戰中に志願したり、懸召したりしてヨーロッパの戰線で近代戰の慘禍を目撃、體驗してきたわかい世代や知識人のあいだにおいては如上の傳統ごとくが無意義なものにおもはれてき、文明の進歩に對する信念が瓦解してしまつた。かれらには人生は無意義で、日本人なら「うつせみの世」といふべき憂鬱感が身にしみてあはれてきた。

一九二〇年一月一日に發効した Volstead Act, すなわち禁酒法は法を無視する氣風を發生させて、密造、密輸入がさかんになり、犯罪者の地下活動、gangsterism が目にあまつてきた。この禁酒法は元來第一次世界大戰の際殺類節約の目的から立法化されたもので

あるけれども、禁酒の運動はすでに一九世紀中葉から、New York や Maine 等の東部諸州においてみられたもので、そこには Puritans の峻烈な道徳觀がはたらいてゐたことは否定できないが、これが一九二〇年、三〇年代の米國の世相を非常にくらくした。この Puritanism が作用して、ひきおこした事件で、この時代の米國の時代相を非常によくあらはしたものに、もう一つ Sacco-Vanzetti 事件といふのである。

三

Upton Sinclair が一九二八年に發表した小説 *Boston* (Boni, New York, 2 vols.) は例の曝露小説で、かれの代表作の一つであるが、純文學と大衆文學、realism と romanticism の中間をいくやうなこの作品の文學的價値はたかいかいものではないけれども、これは Sacco-Vanzetti 事件に取材した最初の作品で、作者は事件の全貌を詳細にわたつてよく研究し、二人の用語にまで實際の記録を活用してをり、第一次大戦直後における米國の國家主義、反動主義、恐露病、民族的偏見をあらはしたもので、約言すれば、Boston の genteel tradition を攻撃したものとて、歴史的に社會學的に重要な文獻である。

一九二〇年四月一五日、Massachusetts 州 South Braintree でおこなはれた強盜殺人事件の容疑者として Nicola Sacco, Bartolomeo Vanzetti の二名のイタリ人が逮捕され、確證がない、あるひは二人はあきらかに眞犯人ではないのに、二人が Daso (イタリ人の蔑稱) であり、無政府主義者で、反戦論者で徴兵を忌避し、勞働運動の積極的指導者であつたためにのみ有罪となり、州の指導者や反動分子の犠牲になつて、死刑を宣告せられたといふので、世界的同情が兩者のうえにあつまつて、フランスの文豪 Anatol France をはじめ、米國では Dorothy Parker, Upton Sinclair, John Dos Passos 等の文人もくははつて、兩名の助命運動が展開された。しかし左翼運動のつねとして、宣傳と煽動とが過大であつたことは、結局二人のためにはならなかつた。一九二七年八月一三日かれらは最後まで潔白を主張しつつ處刑されていつた。

Upton Sinclair のほか、John Dos Passos はこの事件に憤激して U.S.A. 執筆を決意し、その第三部 *The Big Money* に於いて、主人公の一人 Mary French に Upton Sinclair の Cornelia Thornwell 母子と類似の役割をさせてゐる。また James T. Farrell は *Bernard Clare* において、主人公にこの事件を憤激させてゐる。Edna St. Vincent Millay は “Two Sonnets in Memory” においてこの事件を問題にし、Maxwell Anderson は一九二八年にこの事件に取材して “Gods of Lightning” を Harold Hicker-son と合作したほかに、一九三五年にはふたたびこの事件をとりあげて、代表作 “Winter set” (この劇は「春近き冬の頃」といふ譯名で今年はじめ東京で上演せられた) をものして、事件の後日物語として、悔悟した Thayer 判事を描いてゐる。

これらの文藝作品はいずれも、いはゆる進歩的作家の手になつたものであるけれども、Sacco-Vanzetti 事件には裁判所がはに誤審があり、それが最後まで是正せられなかつたことは、どうやら否定できないやうである。そしてかやうな失態を惹起した原因は New England 地方人にしみてゐた Puritanism, genteel tradition があまりにも窮屈なもので、新思想を理解できなかつたことと、Harvard 大學總長 A. L. Howells 等米國第一流の知識人をくばえて Massachusetts 州當局のくだした判断に對する遠慮と、爲政者の權威をきずつけたくないといふ氣持が米國人のあいだにあつたことにあるとおもはれる。

Genteel tradition の發祥地 Boston は第一次大戦直後の反動思潮がひろがるのに最適地の一つであつたが、世界史をひもどいてみると、戦争の後しばらく反動思想が蔓延するのは、いつの時代にもさげがたいことであるらしい。ことに Napoleon 戦役以來、戦争の規模が擴大せられて、國家總力戦のかたちがとられるやうになつてからは、この傾向がとくに顯著になつたことはみのがせない。第一次大戦直後の米國もまたその例にもれなかつた。

誤解のないやうに、ここで一言しておかねばならないが、上述の禁酒運動の一時的成功(若干の州では今日なお禁酒法が施行されてゐる)や Sacco-Vanzetti 事件には genteel tradition のちからが感ぜられるとしても、文學上においては genteel tradition は第一次世界大戦を契機として、その拘束力をうしなつたのである。文藝作品の内容の道德的規制、上品さ(傑作に自然にそなはつてゐる品ではない)、スタイルに關するやかましい要求といつたものは一九二〇年、三〇年代の作家にはかへりみられなくなつたのであつて、

Winstone, Ohio や *Young Lonigan* や *Sanctuary* のやうな作品は一九世紀の米國作家には夢想だにできなかったものであることも、*Hester Prynne* と *The Reverend Mr. Dimmesdale* の悲劇は二〇世紀の作家があつかへば非常にちがった形式で表がかれることはたしかである。そこでわれわれは、崩壊した genteel tradition のあとに生じた、あたらしい社會思潮と文藝作品とを、さらに一歩すすんで觀察し、分析研究すべき段階に到達したのであるが、そのためには一九二〇年代と、一九二九年の經濟恐慌のあとにつづいた一九三〇年代とは別個に考究する方がよい。如上の概観は主として一九二〇年代に重點をおいておこなつたものであるが、この時代の研究目標としてわたくしは (一) 南歐移民の動態とアングロ・サクソン文化の比重輕減、(二) 戦後ヨーロッパ思想と文藝の影響、(三) 女性の解放と性道德の變化、(四) 享樂と狂燥、(五) 國家主義と反動思潮、(六) 現實逃避と (六) 新舊文學論の比較といふ六個の題目をかかげることにする。